告発―復讐？　社会正義？―身内の闇を描く意味

教授　滝　口　直　子
（社会学 文化人類学）

トランプ大統領の姪、メアリー・トランプの描くトランプ一族の内幕 *Too Much and Never Enough*（日本語タイトルは「世界で最も危険な男」小学館）は、たちまちベストセラーである。トランプ大統領に関してはマスコミがいろいろと批判してきたものの、何せ身内の告発である。格段の説得力がある。加えてメアリー・トランプの専門性（悩み苦しんでいる人を援助する臨床心理家）も本の内容の信憑性を高めたのであろう。

本書(英語版)を一読した私は、「そんなにセンセーショナルな書き方ではない」との感を抱いた。主にトランプ兄弟姉妹の父親フレッド・トランプ、一代で不動産業により巨額の富を築き、息子のドナルドが「キンキラキンの華やかさ」で離婚や破産を繰り返し、果ては大統領にまでのぼり詰めたそのステップボードとなった父親と、その父親が「支配する家庭の家事育児を担った」(Trump, p. 31) 母親、メアリーの父親でアルコール依存症関連の疾患で 42 歳（メアリーが 16 歳の時）で死亡したフレッド・トランプ・ジュニアを主な登場人物とした一族の物語―家族の関係性の中でどうドナルドの性格が形成されたのか、その性格が周囲の責任の肩代わりとの相互作用でどう強化されたか―である。マスコミが真っ先に取り上げた大学入学のための SAT 替え玉受験疑惑については、そう長々と書かれているわけではない。

依存症で苦しむ人の支援に携わる私としては、このような家族の内幕は珍しくはない話である。巨万の富や権力ということを除けば。私は巨万の富の一族からの相談を受けたことはないが、「新自由主義の社会において一代で富を築くとは、こういうこともあるのだろう」と納得した。富への執着、失敗を許さないという脆弱性の侮蔑―物事がうまくいかない時には他者非難・・・。

メアリーはなぜ家族の内幕を社会にあらわにしたのだろうか。「もし、私が表だって叔父について語れば、不満だらけの遺産を受け取れなかった姪がお金や復讐の為と描かれるだろう」“…if I spoke publicly about my uncle, I would be painted as a disgruntled, disinherited niece looking to cash in or settle a score”（Trump, pp. 10-11）との懸念がありながらも、なぜ、メアリーは本書を影響力の大きい出版社 Simon & Schuster から出版したのだろうか？ヒラリー・クリントンの支持者で LGBT であるメアリーにとってはトランプ政権の継続は、民主主義の危機にうつることだろう。社会正義の立場から「書かねばならない」のかもしれない。

しかし身内についての暴露本は、自分を晒すことでもあり、自分自身を傷つけることにもなる。

「ニューズウィークは、有名な母親のイメージを奪い取ることで『復讐したい』不満だらけの娘という役を私に割り当てた。母親の友人の中には同じように非難した人もあり、その非難はひどく傷つくものだった。」“Newsweek cast me as the disgruntled daughter who had ‘settled the score’ by despoiling her famous mother’s

image. Some of Mother's friends did as well, and their accusations cut deeply" (Sexton, p.280)。

これは告白的な詩で有名なアン・セクストン(Anne Sexton)の伝記 Anne Sexton, a biography の出版後、マスコミや詩人の友人からの娘リンダ・グレイ・セクストン(Linda Gray Sexton)への反応である。この伝記は、著名な伝記作家(大学教授でもある)Diane Middlebrook の著作であり、娘リンダとの面談などに基づくものである。その中でアンの精神的な病気、アンの病気が家族にどのような感情の竜巻を起こしていったのか、娘への虐待をも含めて述べられている。

なぜ虐待を受けた子どもが、その経験を語るとその子どもが非難されるのだろうか。この伝記が出版されたのは1991年である。1990年代後半から日本でもACという言葉が流行したことがあった。元々はアルコール依存の親を持つ(既に成人した)子どもを指す言葉であったが、親に何らかの問題があったと認識する人、生きづらい人全般にも拡大されて解釈されるようになった。その言葉の流行期、子どもの頃の親との関係性に関する語りは多く見られた。しかし治療や回復の場でその語りが生じるのと、伝記の出版といった世界へ向けての実名での発信は、影響力が違う。身内の闇の暴露は、勇気のいることである。

小さな子どもは親(あるいは親代わり)の存在なしには生きることはできない。子どもが親に依存するというのは当たり前だが、その自然の摂理にさえ、子どもは「親に迷惑をかけている」との罪悪感を抱くことがある。子どもが親の親になることもある。「私が頑張って面倒を見なければ」、「この家族の中で起きていることは絶対に外に知られてはいけない。」「ただ静かにし続けたなら、私にとって好ましくないものを焼いてしまっていたら、どんなに簡単だっただろう、みんなを招き入れるのではなく、私たちの生活への扉を閉めてしまうなら、どんなに簡単だっただろうと私は思った。」"I thought to myself how easy it would have been simply to have kept quiet, to have burned what I did not like, how easy it would have been to shut the door to our lives instead of inviting everyone in" (Sexton, p.278)。

では世間のバッシングの懸念、長く守ってきた秘密を曝け出すことへの不安や罪悪感にもかかわらず、なぜ身内の闇をセラピストに打ち明けるのではなく、表に発信するのだろうか。メアリー・トランプの場合は、トランプ政権を終わらせなければという強い想いかもしれない。リンダ・グレイ・セクストンの場合は、母親の呪縛をこえるための悪魔払いであり("To write about Mother and me would enable me to take control of the demons inside and let them know who was boss. I would be my own witch doctor" p.296)、許し(母親の苦境に共感し、許すことができる)、そこから湧き出る感情を言葉に置き換えること、それが呪縛からの解放につながるという確信が動機になっているようである。"I have forgiven her…
I can finally empathize with what she endured and with the ways in which she both failed and triumphed… I acknowledge that she is gone, and I allow myself to miss her at last….
I cast my feelings into 'language'…to find freedom" (pp.300-301)。

言葉に置き換えることで、私たちは、自分の気持ちを整理し、それを人に伝えることができる。自分の過去からの呪縛を振り返り、そこから解放されることも可能になる。家族の闇に囚われている人にとっても、言葉を見出し、それを他者に発信する、それを読んだ人が共感し、そのプロセスの中で両者とも希望の光を見出すことができる。だからこそ人は身内の闇を言葉に換える努力をするのであろう。

Linda Gray Sexton. *Searching for Mercy Street: My Journey Back to My Mother, Anne Sexton.* Little, Brown: Boston, 1994
Mary L. Trump. *Too Much and Never Enough: How my family created the world's most dangerous man.* Simon& Schuster: London, 2020